

バレンタインの詩

—ある詩的伝統の出現

ナタリー・コーブル

« Et pour qu'on s'aime en Valentine

D'un bout du monde à l'autre bout. »

Germain Nouveau

聖バレンタイン〔ヴァレンティヌス〕は西洋の文化においては恋人たちの守護聖人です。その祭日は伝統的に2月14日に祝われており、私の知るところでは日本でも食べ物（チョコレートのプレゼント）を通じて取り上げられています。この日には人目を忍んだ愛の告白が行なわれ、来るべき婚姻関係が促進され、預言的であることが望まれる暦が恋愛生活に与えられます。なぜ2月14日なのでしょう。この祭日は西洋中世の詩歌に由来している、心臓の贈呈に象徴されるイメージに結び付けられています。しかし聖バレンタインの祭日と中世そして詩歌との結びつきはこれに留まりません。トルバドゥールたちが見つけたとされる表現に従うならば、愛すること〔aimer〕は、歌あるいは詩によってそれを語ること〔dire〕なのです。2月14日にはたくさんのラブレターが郵便、新聞、通学かばんの中あるいはラジオ放送によって広められ、巧みな「バレンタイン的表現」を見つげるために競い合います。イギリスで、アメリカ合衆国でそしてよりひそやかにフランスで、非常に前衛的な詩人たちもバレンタインの詩を書いています。それらは愛の告白であると同時に詩的マニフェストでもあります。エミリー・ディキンソンによって公表された最初のいくつかの詩はバレンタインを題材にしたもので、生涯ずっと独身だった彼女の未来の作品を予告しています。1960年2月13日付のアメリカの雑誌『ニューヨーカー』の表紙の絵では、

一人のビジネスマンがハート商人のショー・ウィンドーを覗きこんでいます。アメリカ・モダニズムの有名な詩人マリアヌ・ムーアは当時73歳でしたが、その雑誌に聖バレンタインに宛てられた詩を發表しています。

この〔バレンタインという〕日付の詩的側面はどこに由来するのでしょうか。またどこにその効果と喚起力があるのでしょうか。形式・言葉の調子・国境・世紀をまたぐこの詩的伝統とその表現形式を本当に理解するためには、有名なジャズ・スタンダードの一つを生み出した〔アメリカの〕民衆文化に目をむけるだけではなく、とくに宮廷風詩歌、中でも中世末の英仏百年戦争期におけるイギリスおよびフランスの詩歌に目をむける必要があります。

戦争における愛

シェイクスピアによって不朽の存在となったりリチャード二世（在位1377-1399）治下のイギリス宮廷、とくに彼の叔父であるランカスター公、イギリス王エドワード三世の息子にしてジェフリー・チョーサーの庇護者であるジョン・オブ・ゴントの取り巻きの間から、ある本格的な詩的流行が生まれました。この流行はフランス語による詩人であり、1370年から1380年代にジョンに仕えていたオトン・ド・グランソンによっておそらく始められたと考えられます。この騎士詩人による作品は全て恋愛に関わるものですが、多くは聖バレンタインの庇護下にあるもので、いくつかの詩ではこの聖人が愛の神の寓意に取って代わっています。この流行は宮廷風詩歌を基として〔冬に春のことを語るという点で〕逆説的な状況にある詩歌を作りだし、冬さらには百年戦争の最中に春と愛の到来を新たに約束したのです。いくつかの詩において、春の幕開けは聖バレンタインの祭日に祝われています。

愛しい人よ、覚えておいて下さい、今日この日に私はあなたを恋人とします。また、あなたの心が完全に私のものになることを望みます。なぜなら恋人たちの間では、あなたもご存じのとおり、来る一年のための恋人を春の最初の日に決めるのが、定められた習慣だからです。

そしてその愛が続くためには、緑の花冠が役に立ちます。次の年がやって来るま

で、各々が自分の花冠を贈るべきなのです。愛しい人よ、覚えておいてください。

このようにはわたしはあなたを選び、あなたを待ちます。なぜなら私の愛はあなたに与えられるだろうからです。あなたは十分苦しみました、間もなくその報酬を受けとるでしょう。

聖バレンタインの祭日にこの習慣が続くため、私の花冠をとりなさい、そしてそれを大事にしなさい。私はあなたを愛するでしょう、なにが起ころうとも。愛しい人よ、覚えておいてください¹。

雅なランカスター公は、自身の周囲に文学的な暦を作り出すことで詩歌を元気づけた、という仮説が考えられるでしょう。時代のさまざまな不幸に直面しつつ、彼はイギリスにおける「恋愛の法廷 *Cours amoureuse*」の王を自認しました。その法廷には彼の周囲の偉大な詩人たちも参加していました（特にジェフリー・チョーサーとジョン・ガワーです。二人ともオトン・ド・グランソンの友人であり、チョーサーはオトンを模倣し賞賛しました。二人はまた聖バレンタインの祭日のために作品を残しています）。その後1400年になると、シャルル六世と王妃イザボーの周囲で、パリに集められた王国の大諸侯たちはとても壮麗な「恋愛の法廷」を実際に打ち立てました。これは憲章によって公にされた詩の一派で、祝祭や月例の歌合わせによって、ペストで荒廃した王国に宮廷風喜びの雰囲気復活させようとしたのです。

(...) 我らが主君であるフランス王、シャルルの息子シャルル六世に。このいともキリスト教的な王国では、目下むごく苦しいペストの害悪が猛威をふるっています。そのなかで、我らのひとときをより優美に過ごしそして新しい喜びの目覚めを

¹ « *Tres douz ami, or t'en souviene / Que aujourd'ui je te retien / Pour mon ami, et aussi mien / Vueil je que tout ton cuer deviegne, / Car c'est la guise, et bien l'entens, / Entre les amans ordenee, / Que le premier jour du printemps / On retiengne ami pour l'annee. / A celle fin que l'amour tiegne / Un chappellet vert fait tres bien : / On doit donner chascun le sien, / Tant que l'autre annee reviegne / Tres doulx ami, or t'en souviene. / Si t'ay choisi et bien attens, / Car m'amour te sera donnee : / Grant peine as souffert, mais par temps / Te sera bien guerredonnee. / Afin que la guise maintiengne / Le jour saint Valentin, or tien / Mon chappellet, mais ça le tien, / Je t'ameray, quoy qu'il aviegne, / Tres doulx ami, or t'en souviene* » (Christine de Pizan, « *Virelais X* », dans *Œuvres poétiques de Christine de Pisan*, publiées par Maurice Roy, t. I, Paris, Firmin Didot, 1886, p.111-112 : 引用中の句読点は若干変更されている).

見出すために、お願い申し上げます。どうか王宮に恋愛の法廷の王をたてて、その王が恋愛の法廷の家臣たちを支配するように命じてください²。

詩誌以前の詩誌ともいえるシャルル六世の「恋愛の法廷」は内戦の混乱を生き延び、40年以上にわたって200人以上の人々の詩的テキストを集めました。

2年後の1402年にはクリスチーナ・ド・ピザンが『薔薇の物語詩 *Le Dit de la rose*』を書き、男女の関係を再定義しようとしました。当時男女の関係は、倫理的・美的手本として圧倒的支持を受けていたギヨーム・ド・ロリスによる『薔薇物語』第一部の伝統のなかで考えられていましたが、彼女はこの関係を聖バレンタインの庇護のもとに捉え直しています。

以上は聖バレンタインの日に書かれた。その日多くの恋人たちが朝早くから、今後一年のために愛を選択する。それはこの日の特権である³。

数年後、イギリスで捕囚生活のうちにあったシャルル・ドルレアンは、寓意的な『愛神の側近たち *La Retenue d'Amour*』の中で、自分の恋愛の始まりを恋人たちの祝祭に合わせて描きそれを喜んでいます。

〔他方で〕オトン・ド・グランドソンは『聖バレンタインの祭日の夢 *Le Songe de la Saint-Valentin*』で先駆を果たしていました。この夜の夢のなかで、語り手は庭に集められた鳥たちが向こう一年間のためにつがいをつくるのを目にします。

² « (...) requerir au roy nostre souverain seigneur Charles, filz de Charles, roy de France, VIe de ce nom, en ceste desplaisant et contraire pestilence de epidimie presentement courant en ce tres crestien royaume, que pour passer partie du tempz plus gracieusement et affin de trouver esveil de nouvelle joye, il ly pleust ordonner et créer en son roial hostel un Prince de la Court d'Amours, seigneurissant sur les subgés de retenue d'icelle amoureuse Court » (Carla Bozzolo et Hélène Loyau, *La Cour amoureuse dite de Charles VI*, Paris, Le Léopard d'Or, 1982, p. 36). この憲章によれば法廷の創設は1月6日に行われている。

³ « Escript le jour saint Valentin / Ou mains amans tres le matin / Choissent amours pour l'annee, / C'est le droit de celle journee » (Christine de Pizan, *Le Dit de la rose*, dans *Poems of Cupid, God of Love : Christine de Pizan's Epistre au dieu d'amours and Dit de la Rose (...)*, ed. by Thelma S. Fenster and Mary Carpenter Erler, Leiden and New York, Brill, 1990, vv. 639-642).

夢見ることは心楽しい。それがただ毎日、時に一時間というわずかな時を過ごすためであっても。夢は心を静め体を休ませ、安息と安らぎをもたらすのだ。夜も昼も、あらゆることについて夢に身をまかせられればよいのに。なぜなら、もろもろの考えが賢いか愚かかなどとは、それらが行動か言葉で明らかにされないうちは決して判断できないからだ。それに対して、疲れ果ててただ休息のみを切望するものにとって、夢はかぐわしい香りを心と与え、深い眠りにおちてしまうまで心は存分に自由になることができる。その時、人は眠りながら良い夢か悪い夢を見るだろう。あるいは私に起こったように、不思議な夢を見ることもある。それは聖バレンタインの祭日の朝であった⁴。

夢見る語り手はここでパートナー選を拒むハイタカに注目しますが、それはハイタカ自らが「鳥たちの集い」で説明するように、秘かに愛する手のおよびがたい「雌のなかでもっとも高貴なもの」への忠誠ゆえなものでした。ここには詩人自身の姿が透けて見えます。この今様トリスタンはフランス王妃に恋をし、イザベルという名の女性に対して見事な「願い」を作り、その名を折句としてある作品の各詩行冒頭に記しています⁵。

私は願いを表明することがある。それは私の様々な不幸を長い間堪えるための唯一の手段だ。心を軽くする願いは良いものだ。それをする事で心を紛らわせ、自由に誤りなく楽しみを得ることができる。私は誓願をたくさんもち、私の願いは罪のないものであるから、愛にはあまり恵まれない私は、ぐずぐずせずにそれらを表

⁴ « Il est délicieux de rêver, / ne serait-ce que pour passer / le temps, chaque jour parfois une heure. / La rêverie, qui apaise le cœur, / met aussi en veille le corps, / elle donne repos et réconfort. / Puisse l'homme se livrer jour et nuit, / sur tout sujet, à ses rêveries. / Car on ne peut jamais juger / si les pensées sont sages ou folles, / tant qu'elles ne sont pas avérées / par des actes ou par des paroles. / En revanche pour l'homme épuisé / qui n'aspire qu'au repos, / la rêverie met du baume / au cœur, s'il peut laisser aller / le livre cours de ses pensées / jusqu'à sombrer dans le sommeil. / Il fera alors en dormant / songe ou cauchemar, / un rêve étrange / comme il m'est arrivé un matin, / le jour de la Saint-Valentin » (Oton de Grandson, *Le Songe de Saint-Valentin*, dans *Poésies*, éd. par Joan Grenier-Winther, Paris, Champion, 2010, p. 213-214).

⁵ このイザベルの身元と王妃イザボア・ド・バヴィエールとの同一性については、アルチュール・ピアジェの研究 (Arthur Piaget, « Oton de Grandson amoureux de la reine », in *Romania*, 61, 1935, p. 72-82) を参照。

明したい⁶。

チョーサーもまたその有名な『百鳥の集い *Parliament of Fowls*』において、この夢の宮廷風靈感を英語に移しかえ（そしてずらし）、自分が倦むことなく読んだものを上手く活用できることを示してみせました。チョーサーにとって詩を作ることは、創意工夫を加えた繰り返し・学識ある遊戯であると明確にされており、靈感を「古い本」から得ることで先駆的な作品を作り上げることができるのです。『百鳥の集い』はおそらく若きリチャード二世の結婚（1382年）に際して書かれたものですが、聖バレンタインについてのロンドーで終わっています。この主題に関して英語で書かれるロンドーとしてはおそらく初めてのもので、その反復句は有名です。

ようこそ、夏よ、暖かき日の光にて、／汝、冬の嵐 追い払い、／長い闇夜を ほ
うむりぬ！⁷

一見してそう思われるのとは裏腹に、状況に則してつくられるこうした宮廷風詩歌は簡単なものではまったくありません。形式についての思索、そしてまた、イギリスで固定されていた流行を流動的伝統に変化させるような詩的活動に始めから結び付けられているのです。聖バレンタインの祭日は当時流行していた詩形式の可能性を究める口実になっています。ロンドー、バラッド、ヴィルレー、シャンソン、韻文による手紙、願い、嘆き、夢、寓意物語、レー、中世末の詩作技巧においてもはやされ

⁶ « Il me revient de formuler mes souhaits, / Seul expédient pour pouvoir supporter / A longue haleine mes multiples malheurs. / Bon est le souhait qui soulage le cœur : / En le faisant on peut se divertir, / Libre et sans faute se donner du plaisir. / Et puisque j'ai des vœux en abondance / et que mes souhaits sont tout en innocence, / moi que l'amour a bien peu gratifié, / sans plus attendre je veux les formuler » (Oton de Grandson, « Souhait de la Saint-Valentin », dans *Poésies*, éd. citée, p. 219-221 の冒頭)。「願い souhait」とはジャンルというよりも詩的口実である。韻文（ここでは平韻八音綴）によって詩人は宛先人に対してある願望を表明する。ここではその宛先人の名 [Isabel] が最初の各詩行の冒頭において示されているのである [引用は現代仏語訳だが折句は再現されており、各詩行冒頭をつなぎ合わせると Isabel になる]。

⁷ « Now welcome, somer, with thy sonne softe, / That hast thes wintres wedres overshake / And driven away the long nyghtes blake ! » (Geoffrey Chaucer, *The Parliament of Birds*, ed. by Steve Ellis, Richmond, Hesperus Poetry, 2004, p. 44-46 より)。〔日本語訳は『チョーサーの夢物語詩』塩見知之訳、高文堂出版社、1981、p. 276-277 による。〕

ていたあらゆる形式が網羅されています。状況は詩的活動を共同体の結束を強めるものとし、その場において個々の声はリズム的・テーマ的・形式的な変奏にいそしむのです。

この詩的伝統、このトルヴェールの発想の源は、時代を超えて色々な様式をとります。イギリスでは確固としたものになりますが（シェイクスピアの『ハムレット』においてオフェリアは死ぬ前にバレンタインの歌を歌います）、バレンタイン詩の伝統はついには新世界、さらにそこの名高い前衛的詩人たちをも征服するに至ります。この旅程はフランスにおいてももう一つの方向を形作ります。シャルル・ドルレアンの遠い子孫ともいえるイギリス最良の詩人たちがバレンタインの詩を書いているのです。ヴェルレーヌは『言葉なき恋歌』において中世のロンドーを想起させる作品を書いています。

蜜蜂が怖いように／僕には接吻が怖い。／夜も寝られずに／僕は心配だ。／僕には接吻が怖い！

でも、やはり、僕はケートが好きだ／そうして彼女の美しい目が、／彼女は華奢だ、／面長で色白で、／ああ、僕はケートが好きだ！

今日はヴァレンタイン聖者のお祭りだ！／今朝僕は彼女に告げねばならぬのだ……／でもそれは／なんとも口にだしにくい／ああ、さても、ヴァレンタインはつらい日だ！

彼女と僕は言いかわした仲だ／ああ、なんと嬉しいことだ！／とまたなんと難儀なことだ／言いかわした女の側に／恋人づらしているなんて！

蜜蜂が怖いように／僕には接吻が怖い。／夜も寝られずに／僕は心配だ。／僕には接吻が怖い！⁸

⁸ « J'ai peur d'un baiser / Comme d'une abeille / Je souffre et je veille / Sans me reposer : / J'ai peur d'un baiser ! / Pourtant j'aime Kate / Et ses yeux jolis. / Elle est délicate, / Aux longs traits pâlis. / Oh ! que j'aime Kate ! / C'est Saint-Valentin ! / Je dois et je n'ose / Lui dire au matin... / La terrible chose / Que Saint-Valentin ! / Elle m'est promise, / Fort heureusement ! / Mais quelle entreprise / Que d'être amant / Près d'une promise ! / J'ai peur d'un baiser / Comme d'une abeille / Je souffre et je veille / Sans me reposer / J'ai peur d'un baiser » (Paul Verlaine, « A poor young shepherd », dans *Fêtes galantes. Romances sans paroles*, précédé de *Poèmes saturniens*, éd. par Jacques Borel, Paris, Gallimard, 1973, p. 153). [日本語訳は『ヴェルレーヌ詩集』堀口大學訳、新潮文庫、1950、p. 157-159による。]

彼の友人ジェルマン・ヌーボーは、イギリスから帰った際にヴァレンティーヌという実在する女性のために聖バレンタインの祭日に関する詩集を作ります。この本はそのまま『ヴァレンティーヌ *Valentines*』と名付けられますが、タイトルの複数形は〔聖バレンタインの祭日に関する〕詩的伝統の微かなしかし否定しがたい痕跡を表しているのです。詩人はまた彼自身の名前「ヌーボー *Nouveau*」をもじって自らの実験的精神を前面に出そうとしています。

しかしこの名は私がお前を愛するように予め定めているのだ。おお、わがヴァレンティーヌよ⁹。

シュールリアリストたちはその預言的表現や「愛への愛」に共感し、彼をランボーに並ぶ先駆者と考えたのでした。

「私はあなたを選ぶ」——自然の秩序

十四世紀においてこの詩的伝統の登場は複数の謎を残していました。なぜ冬に春のことを語るのでしょうか。なぜ一見して関係のない聖人である聖バレンタインの庇護下に愛のテーマが集められるのでしょうか。聖バレンタインとはだれでしょうか。どのような具体的状況が詩の流通の背景にあったのでしょうか。

十四世紀のイギリスやフランスにおける冬の厳しさは疑うべくもありません。それにもかかわらず、最初期の作品からこの詩的主題は変わることなく季節の変化、春の始まりを顕揚します¹⁰。芽生えや花の開花、とくに動物行動学がそれを証明するような鳥のつがいを目前にした、自然そのものによる預言といってよいでしょう。自然は豊穡の季節の目覚めを予期するのです。

1958年のカミングズの詩でも、自然による静かな預言にあらわれた、未来をはらん

⁹ « *Pourtant ce nom me prédestine... / À t'aimer, ô, ma Valentine !* » (Germain Nouveau, « *Le nom* », dans « *Valentines* » et autres vers, Paris, Messein, 1921, p. 53, repr. Gallimard, 1981, p. 125). ランボーとヴェルレーヌの友人であったジェルマン・ヌーボーは『ヴァレンティーヌ』を1886年に書いたが、それは生前には出版されなかった。

¹⁰ 本稿最初の引用を参照。

だ密度が語られています。

ただ死ぬために生きている／人はだれでも夢をみまい／あなたの贈物がわたし
より／私を幸福にさせるなんて

しかしただ成長するためにほろんで／行く物はどれでもいつも思うに違いない
／春のことは／春が一番先に知っているように¹¹

詩はここで季節にまつわる使命を再び見出します。その使命とは最初のトルバドゥール以来、恋の始まりを春の新緑に現れる自然の再生に結びつけることでした。これはある有名な宮廷風恋愛詩の冒頭でも見出されますが、ここでは愛と詩が等しいことが語られています。トルバドゥールやトルヴェールはこの等しさを歌うことで結果として「愛を発明した」とされているのです¹²。

5月に 日の長くなるころ／遠くの鳥の歌が 私には心地よい／そして私は そ
こから出発してきたとき／遠くの恋を 思い出す […] ¹³

時を得た鳥に重ね合わされた詩人のイメージは、伝統的比喻として歌うことと飛翔することを結びつけるにとどまりません。このイメージは神による天地創造と世俗的恋愛が調和しているという考えを称揚しようとしているのです。状況的であるバレンタインの詩のなかで、恋人たちもまた「私はあなたを選ぶ」と言っています。あらゆ

¹¹ « never could anyone / who simply lives to die / dream that your valentine / makes happier me than i / but always everything / which only dies to grow / can guess and as for spring / she'll be the first to know », e. e. cummings, *Poems (1958)*, dans *Complete poems (1904-1962)*, ed. by Georges J. Firmage, New York, Liveright, p. 718. [日本語訳は e. e. カミングズ『95poems から』藤富保男訳、尖塔、1962、p. 21 による。]

¹² とくに Paul Zumthor, *Essai de poésie médiévale*, Paris, Seuil, 1972 のほか、Jacques Roubaud, *La Fleur inverse. Essai sur l'art formel des troubadours*, Paris, Ramsay, 1986 および最近出版された Michel Zink, *Les Troubadours. Une histoire poétique*, Paris, Perrin, 2013 を参照。

¹³ « Lanquand li jorn son long en mai / M'es bèls doç chants d'aucèls de lonh, / E quand me soi partits de lai / Remembra.m d'un'amor de lonh (...) » (Jaufré Rudel, « Amour de loin et reverdie printanière », in *Anthologie des troubadours*, éd. par P. Fabre, Orléans, Paradigme, 2010, p. 98-99). [日本語訳は瀬戸直彦『トルバドゥール詞華集』大学書林、2003、p. 169 による。]

る点において鳥のそれに比べられるこの選択は、聖バレンタインそして自然の庇護のもとにあります。詩人たちはみなそれに同意し、春の目覚めに結び付けられる様々な予兆の預言的価値を〔その自明さゆえに〕疑問に付すほどです。なぜなら愛は自然の力であり、愛することなしに創造され創造することは無意味（そして不可能）だからです。自然の傾向に従うという事は、世界に自らを開くことであり自然の声を見出すことです。「ああこの大地が造られたのは恋人たちのため (...)。全てのものが求愛に出掛ける——地上で、海で、空で¹⁴」とエミリー・ディキンソンは彼女の最初の詩で歌っています。

オトン・ド・グランソンと彼の友人たちは、彼らの糧である伝統の改変という遊戯によって、非時間的であった再生とそれにまつわるエロティシズムを、暦という計算可能な時間軸〔すなわち聖バレンタインの祭日〕に組み込みました。2月14日は美しい季節、4月の歌や5月の祭日によって称えられる春を彩る詩的出来事の端緒になります。しかしこの暦においては、愛は（かつての宮廷風恋愛詩におけるように）同じ形で繰り返されるものではありません。〔むしろ〕暦は恋愛の進展をたどることを可能にします。聖バレンタインは最初の出会い、最初の帰属の証、愛の告白や愛の発端をつかさどるのです。彼はまた預言をします。それゆえにおそらく聖バレンタインの祭日に関する青春の詩がのちに詩的作品を生み出すのです。エミリー・ディキンソン、エリザベス・ビショップ、シルヴィア・プラスは、バレンタインの詩を通して詩人の職に導かれ、後から見れば預言的となる文体上の第一歩を形作ります。

愛の飛躍の力とこの感情的選択の特殊性を表現するために、中世の詩人たちはバレンタインの詩において「選ぶ *choisir*」という言葉がいまだ持っていた意味的な豊かさを保ち続けています。現代フランス語においてそうであるように、この言葉は明らかに意志を示す言葉です。花束から一輪の花を選ぶという自由な身ぶりにおいて、「選ぶ」ということは「選抜する *élire*」ということの意味し、選択することそのものによ

¹⁴ « Le monde fut explicitement *créé* pour les amants (...). Tout s'assemble partout, en mer, sur la terre comme au ciel » (*The Poems of Emily Dickinson*, ed. by R. W. Franklin, Cambridge (Massachusetts), The Belknap Press of Harvard University Press, 1998, repris dans Emily Dickinson, *Poésies complètes*, trad. Françoise Delphy, Paris, Flammarion, 2009, p. 10 : 引用テキストは講演者が仏訳したものである)。〔日本語訳は『愛と孤独と—エミリー・ディキンソン詩集III—』谷岡清男訳、ニューカレントインターナショナル、1989、p. 334 による。〕

って主体であることを主張することになります。「私はあなたを選ぶ *Je vous choisais*」という言葉は愛の詩においては告白を意味し、また愛とその詩的表現がまったく等しいことが明らかにされ、詩人としてのアイデンティティーが欲望と一体化させられます。しかし古いフランス語においては、「選ぶ」という言葉はまずすべてを「眺める *regarder*」ということを意味し、虜になることの決定的瞬間、すなわち視線がすれちがひ、捕まえそしてその視線を虜にしてしまったある像を一挙に把握することを意味します。恋の傷口というオウィディウスのモチーフは中世風に再現されます。この視覚の遊戯において、目と心は的となって捉えられて虜囚となり、全能の愛の神へ封建的に服従するのです。〔以下に引用するような〕様々な反復句と反歌が詩的発言を条件付け選別する枠組みを喚起します。

「お許してください、必要が私にそれをなさしめたのです¹⁵。」

「心がそこにあるところに、体は服従しなければならない¹⁶。」

これより明確に恋の感情のパラドックスを表現することは出来ませんでした。すなわち、飛躍した心は理性（と肉体）を拘束しますが、しかしこの従属は同意されたもので、そこから逃げることは出来ないのです（「バレンタイン *valentin*」は「運命 *destin*」と韻を踏みます）。しかしこの服従は世界に対して目を開いてもくれます。

この新しい聖バレンタインの祝日に、慣例を守るために、愛の欲望によって私の心は娘を選んだ¹⁷。

このように聖バレンタインの祭日は暦の時間内で、作品内で反復される「一目ぼ

¹⁵ « Pardonnez-moi, besoin me le fait faire » (Oton de Granson, *Poésies*, éd. citée, p. 195-197, et p. 222-224).

¹⁶ « Où le cœur est, le corps doit obéir » (John Gower, « Cinkante ballades », dans *Œuvres complètes*, éd. par G. C. Macaulay, Grosse Pointe, Scholarly Press, 1968, t. I, p. 365).

¹⁷ « Pour la coustume maintenir / Ceste Saint-Valentin nouvelle / mon cueur a choisi damoiselle / Moyennant l'amoureux desir » (Guillaume de Tignonville, « Rondel », in Charles d'Orléans, *Le Livre d'Amis : poésies à la cour de Blois (1440-1465)*, éd. par V. Minet-Mahy et J.-C. Mülhethaler, Paris, Champion, 2010, p. 492).

れ・私はあなたを選ぶ」という神話を再生させ、愛の瞬間（これはのちに反芻されることとなります）が持つ拘束力とその預言し幕をひらく力を明らかにするのです。

私はあなたを選ぶ、高貴で誠実な愛よ。私はあなたを選ぶ、至上の喜びよ。私はあなたを選ぶ、優美なやさしさよ。私はあなたを選ぶ、甘い満足よ。私はあなたを選ぶ、すべての私の力をもって。私はあなたを選ぶ、全身全霊をもって。私はあなたを選ぶ、約束をしながら、決して他の人を選ぶことはない。

私はあなたを選ぶ、よき女性のうちで最高の人。私はあなたを選ぶ、偽りを考えることなく。私はあなたを選ぶ、花のうちで最も美しい花よ。私はあなたを選ぶ、ためらうことなしに。私はあなたを選ぶ、私を支えてくれるものよ。私はあなたを選ぶ、私の力と知が及ぶかぎり。私はあなたを選ぶ、そしてあなたに保証する、決して他の人を選ぶことはない。

私はあなたを選ぶ、憔悴への救いよ。私はあなたを選ぶ、慰めを得るために。私はあなたを選ぶ、苦しみを癒すために。私はあなたを選ぶ、嘆くのをやめるために。私はあなたを選ぶ、常に決して変わることなく。私はあなたを選び選んだ、聖バレンタイン（P写本では「愛の神」）がそれを証してくれる、決して他の人を選ぶことはない¹⁸。

「運命」——社交の遊戯と喜び

しかしながら、聖バレンタインの祭日の詩を秘密裏に行なわれた愛の交換の痕跡として読むのは誤りといえるでしょう。愛の選択はそれが自然の秩序にそったものであ

¹⁸ « Je vous choisi, noble loial amour, / Je vous choisy, souverainne plaisir, / Je vous choisy, gracieuse douceur, / Je vous choisy, tres douce souffrance, / Je vous choisy de toute ma puissance, / Je vous choisy de cuer entier et vray, / Je vous choisy par telle convenence / Que nulle autre jamais ne choisiray. / Je vous choisy, des bonnez la meilleur, / Je vous choisy sans panser decevance, / Je vous choisy, des plus bellez la flour, / Je vous choisy sans faire variance, / Je vous choisy ma droicte soutenance, / Je vous choisy tant com je puis ne sçay, / Je vous choisy et sy vous affiance / Que nulle autre jamais ne choisiray. / Je vous choisy, confort de ma langour, / Je vous choisy pour avoir alegence, / Je vous choisy pour guarir ma doulour, / Je vous choisy pour saner ma grevance, / Je vous choisy sans fin en peverance, / Je vous choisy et choisie vous ay, / Saint Valentin en prens en tesmoignance (manuscrit P ; variante : le dieu d'Amour) / Que nulle autre jamais ne choisiray » (Oton de Granson, *Poésies*, éd. citée, p. 213-214).

るゆえに、詩というほの暗い小部屋に留まるものではないからです。愛の選択は共同体的側面を有し、中世においては祝祭の儀式に示されるようなものでした（今日でいえば新聞に現れることに相当するでしょう）。聖バレンタインは実在した社交ゲームの庇護者でもあります。田舎においても都会においても、そして宮廷においても、さらには宮廷が現われるよりもずっと前においてもそうなのです。古文書やフォークロアの伝統が恋に纏わる古い祭りの存在を証しています。それらは聖バレンタインの祭日において、種々の社会グループの中での性的なことがらを儀礼化するのです。19世紀イギリスのケント（ジョン・ガワースの生誕の地ですが）では、婚約は陽気なくじ引きによって決められていました。20世紀の人類学者たちはまた、オトン・ド・グランソンの生まれたサヴォワの民衆における聖バレンタイン崇拝について記録していますが、その崇拝はおそらくは非常に古くから存在する異教的な行列に結びついています。フランスではヴォージュ地方の山々において、20世紀に至っても適齢期の男女を集団で組み合わせる祭りが存在していたことが多くの証言から分かっています。これらの祭りは固有の身ぶりや歌を有していました。同種の例が他の民衆の儀礼にも見つかります。昔の田舎にはそれぞれ固有の輪舞があったのです。

ひざまずけ（繰り返し）、愛の眼差しにかけて、愛とのぼせ心の眼差しにかけて、愛のまなざしにかけて。

そしてキスをしろ（繰り返し）、愛の眼差しにかけて、愛とのぼせ心の眼差しにかけて、愛のまなざしにかけて。（以下続く。）¹⁹

すでに15世紀にはフランスにおいてもイギリスにおいても、バレンタインに関する宮廷的慣例が日常言語にさまざまな造語として反映されています。シャルル・ドルレアンの作品では「聖バレンタインの祭日に選ばれた女性 *valentinée*」ということばが「運命 *destinée*」ということばと豊かな韻を形成しています。英語ではジョン・リド

¹⁹ « Mettez vous à genoux (bis) / Par les yeux d'amour, / par les yeux d'amour et d'amourette / Par les yeux d'amour. / Et puis embrassez vous (bis) / Par les yeux d'amour / Par les yeux d'amour et d'amourette, / Par les yeux d'amour (etc.) » (« Ronde de Saint-Valentin populaire » (XIX^e siècle), in P. Saintyves, « Valentines et valentins : les rondes d'amour et Cendrillon », in *Revue de l'histoire des religions*, 81, 1920, p. 158-182, 引用は p. 168-169 から).

ゲイト以来、「バレンタイン valentine」は聖バレンタインの祭日に愛される人、その祭日における贈り物や詩を意味しています。

田舎の社会におけるこれら祭りの役割はあきらかでしょう。踊りと歌の影響下で組み合わされたカップルは、その後おそらく結婚することになります。その年に「不運 Malchance」が訪れたならばこのゲームは実を結びませんが、[かといって]男女のそうしたためらいが社会的秩序を乱すことはありません。目的としているところは非常に真剣なものですが、田舎における聖バレンタインの祭日は軽さと諧謔に結びついています。遊戯的なトーンがいかに発揮され、しばしば滑稽なカップルや突飛なカップル（しゃれた女の子とよぼよぼの年より）が作られます。町でも田舎でもこの遊戯はまた倫理的・政治的な意味を持っていました。すなわちその重要な役割として、欲望に付随するような、あるいは歴史の諸状況や悲惨からくるあらゆる暴力を整理誘導していたと考えられるのです。

よく知られているように、中世の宮廷社会においては結婚が感情を伴うのは幸運かつ稀なケースに限られていました。従って恋愛の儀礼は、この諧謔の精神を共有できるような婚姻による政治的同盟の下で発展しました。聖バレンタインの祭日に纏わる宮廷風詩歌もまた、コード化された社交ゲームに結び付けられて[その場の]「慣例を守る」ことに寄与したのです。

ある詩から別の詩へと恋愛の儀礼の論理を追うのは、そうした論理がおそらくは場所によって変化するゆえに困難です。例えばクリスチーナ・ド・ピザンは先に[本稿の冒頭で]引用したヴィルレーのなかで花冠のプレゼントについて語っていますが、他方でシャルル・ドルレアンはくじ引きに言及しています。そのくじ引きは男と女を結びつけ、一年の間雅な思いを抱き続ける義務を負わせます。実際、シャルル・ドルレアンはある年には同年代とは言い難い奥方のパートナーを務めさせられましたし、また別の年には義理の妹であるマリー・ダングレームの相手を務めさせられたのです。

シャルル・ドルレアンはこの年ごとに行なわれる遊戯の愚かさを何度も嘆いて、バレンタインを嘲笑し伝統を笑っています。その一方で、彼はオトン・ド・グランソンに並ぶバレンタイン詩の最大の作り手でもあります（あらゆる世紀に渡ってです）。シャルル・ドルレアンもオトン・ド・グランソンも、数十年の差はあれ、ともにイギ

リスの詩派から学びました。シャルル・ドルレアンはアザンクールの戦いの後25年を捕虜としてイギリスで過ごしたのですが、チョーサーの孫娘の家で教養ある人々に囲まれ、居心地よく暮らしました。フランスに戻る以前にもイギリスにおいて、自作品の恐らくは自らによる英語訳を流通させています。そこには彼が書いた聖バレンタインの祭日に関するバラードとしては唯一のものが残されています。このバラードで彼は、あきらかな隠遁の身ぶりをもって、自身が閉じ込められた現実的・比喩的な「つらい思いの苦しい床 *le dur lit d'ennuieuse pensee*」の空間に、愛の一日という枠組みを結びつけています。この美しい反復句は、捕虜という条件の寓意的移し替え以上に、隠喩的な思想を表明しています。この思想はシャルル・ドルレアンの詩人としてのアイデンティティーの署名を形づくるのです。

聖バレンタインの祭日の太陽がその燭台に火をともし、すこし以前のある朝早く、こっそりと私の閉じられた部屋に入って来た。彼が持ち込んだ光が私を憂いの眠りから目覚めさせる。私はその眠りの中で夜じゅうまどろんでいたのだが、つらい思いの苦しい床で。

その日、愛の獲物を分け合うために集まった鳥たちが、彼らの言葉で話し鳴く。それは自然が彼らに約束していた糧、すなわちそれぞれが選んだパートナーを請い求めるためである。私はその鳴き声のせいで再び寝入ることができない、つらい思いの苦しい床で。

その時私は涙で枕をぬらし、つらいさだめを嘆く。そして言う。「鳥たちよ、お前たちは愉しみと待望された喜びの中で、それぞれがつかいとなっている。だが私はそうではない。死が私を裏切り、私の恋人を奪ってしまったからだ。私は喪に服しつつ嘆く、つらい思いの苦しい床で。」

愛すると決めた男女が、今年、バレンタインの恋人を選びますように。私は慰めを奪われ一人横たわっている、つらい思いの苦しい床で²⁰。

²⁰ « Le beau souleil le jour saint Valentin / Qui apportoit sa chandelle alumee / N'a pas longtemps entra un bien matin / Priveement en ma chambre fermee / Celle clarté qu'il avoit apportee, / Si m'esveilla du somme de soussy / Ou j'avoye toute la nuit dormy / *Sur le dur lit d'ennuieuse pensee.* / Ce jour aussi pour partir leur butin / Des biens d'Amours faisoient assemblee / Tous les oyseaulx qui parlans leur latin / Croyent fort demandans la livre / Que Nature leur avoit ordonnee : / C'estoit d'un per comme chascun choisy, / Si ne

ブロワに戻って来たとき、シャルル・ドルレアンは段々に付け加えられた詩のアルバム抱えていました。彼はバラードの構成の輝かしさよりもロンドーのナーバスな活力を愛し、アルバムの紙幅や城を詩人たちに開放しました。詩人たちはシャルル・ドルレアンの作品の脇に自分たちの詩を書き写しています。このアルバムは今日フランス国立博物館に所蔵されていますが、20ほどのバレンタインの詩がそこに確認できます。それらはブロワ宮廷の詩的サークルが、長い〔シャルル・ドルレアンの〕イギリス時代のあとで「愛の宮廷」となっていたことを示しています（こちらもまた〔ジョン・オブ・ゴントのように〕王の息子〔＝シャルル・ドルレアン〕によって支えられていたのです）。数々のロンドーで用いられる「この聖バレンタインの祭日に *en ce jour de saint Valentin*」という反復句は音楽的記憶であり、数行の詩行、二種類の韻と僅かな数の言葉を通じて、各々の詩人は自らの詩の知識・巧みさを披露し、宮廷の喜びのため続けられた伝統の中に自らの戯れを付け加えようとしたのです。

この聖バレンタインの祭日に、新たな詩人たちよ、やって来るがいい。フランス語やラテン語で、喜びや苦しみの詩行を作るがいい²¹。

民衆文化に触れることで学識ある詩歌は望ましい軽さをもち、何でもない風をよそおいながら変化しつつ繰り返される「恋の戯れの言葉 *formule flirt*²²」を作りだしてい

me peü rendormir pour leur cry / *Sur le dur lit d'ennuieuse pensee*. / Lors en moillant de larmes mon coessin / Je regrettaï ma dure destinee / Disant : « Oyseaulx je vous voy en chemin / De tout plaisir et joye desiree ! / Chacun de vous a per qui lui agree / Et point n'en ay, car Mort qui m'a trahy / A prins mon per dont en dueil je languy / Sur le dur lit d'ennuieuse pensee. » / Saint Valentin choisissent ceste annee / Ceulx et celles de l'amoureux party ; / Seul me tendray, de confort desgarny / *Sur le dur lit d'ennuieuse pensee* » (Charles d'Orléans, « Ballade 66 », dans *Ballades et rondeaux*, éd. par Jean-Claude Mühlethaler, Paris, Le Livre de Poche, 1992, p. 186-88). このバラードは中期英語に訳され、シャルル・ドルレアンの英語による詩集の中に収録されている。この詩集にはフランス語版が存在しない別のバレンタイン詩も含まれている (*Fortunes Stabiles. Charles of Orleans's English Book of Love*, ed. by Mary Jo Arn, Binghamton, New York, 1994, p. 224-225 et p. 342-343を参照)。

²¹ « A ce jour de saint Valentin / Venez avant, nouveaux faiseurs ! / Faites de plaisir ou douleurs / Rymes en français ou latin ! » (Charles d'Orléans, *ibid.*, p. 598).

²² この美しい表現は、フランスの女性詩人アンヌ・ホルチュガルの最新の詩集から借りられたものである (Anne Portugal, *La Formule flirt*, Paris, P.O.L., 2011)。

ます。その例にはヴェルレーヌ、ラルボー、アポリネール、タルデュ、プレヴェール、クノー、ジャック・ルーボー、アンヌ・ボルチュガルが続くでしょう。この詩的な系列は点線のように続くもので、みな逃げ去るようなイメージ、何の変哲もない細部、移動の早さ、身のかわしの技術を共有しています。

灰色の海で、この悲しい冬の日を摘むがいい (...) 私には優しさと平和が必要だ、
おお妹よ²³。

忘れてはいけないのは、多くの詩人にとって軽さは、自我に由来するものであれ歴史に由来するものであれ、あらゆる種類の重力に対する挑戦であるということです。聖バレンタインはそうした詩人たちの守護聖人でありつづけているのです。

冬の心——二月の亡霊

しかしなぜバレンタインという人が選ばれたのでしょうか。フランス語においても英語においても、普通名詞になる以前のバレンタインという名の起源はかなり曖昧といえます。その祭日は中世初期からすでにキリスト教の歴史において場所を占めていました。宗教文学は少なくとも七人以上のバレンタインという名の殉教者を記録しています。最も有名なのは4世紀イタリアの司教で、その聖人伝は「野生の思考」（レヴィ・ストロース）に固有の統一のない改変作業を通して波及しました。このキリスト教聖人の起源となる諸人物には恋人たちの聖人を誕生せしめるはっきりとした要素はなにも見られなかったのですが、その殉教日は他宗教の記憶を抱合しました。これらの記憶が彼を化石化した神話となし、彼の名はこの神話の記憶を形式化します。季節の論理はキリスト教以前の記憶と重なりあい、その暗示に富んだ力は批評的・創造的なイメージをいまだに喚起し続けています。

ローマの暦において、2月14日は有名な宗教的祭日に対応しており、オウィディウスはその『祭暦』のなかでこれにかなりの紙幅を割いています。すなわち13日から15

²³ « Cueille ce triste jour d'hiver sur la mer grise (...) J'ai besoin de douceur et de paix, ô ma sœur » (Valéry Larbaud, « Carpe diem », dans *A. O. Barnabooth, ses œuvres complètes (...)*, Paris, Gallimard, 1995, p. 64).

日に祝われるルペルカーリア祭です。古くに（また田舎に）起源をもつこの祭日は家畜の群れの守り手であるファウヌスに捧げられていました（この祭日はまたオウィディウスによってローマのオオカミに結び付けられます）。それらは2月の一部を占める浄化と豊穡の儀式となり（*februare*とは浄化するという意味です）、移り変わりの季節に踊りとエロティックな伝説を結びつけます。キリスト教の教会はこれを5世紀に禁じ、聖母の浄化の祭りがとってかわりました。

他方でまたこの古代の暦の記憶は西欧では北方のケルト信仰に出会っています。2月に結び付けられるのは熊の冬眠からの目覚めで、それは冬眠（11月に祝われます）のあとにくる美しい日々を復活を予告します。多くの祭りがこの信仰に付き添っており、野性を飼い慣らそうとするさまざまなパレードが行なわれました。キリスト教教会はこれらの祭りを苦勞してなんとか覆い隠し、その結果として聖人祭日の暦は11月と2月にとても忙しくなります。すなわち聖バレンタイン、聖ウルサン、聖マルタン、聖ブレーズの祭日ですが、これらはみな森の熊とオオカミを隠すものだったといってもよいでしょう²⁴。こうした時の記憶のゆえに、聖バレンタインの祭日はとくに北ヨーロッパ、王であり熊でもあるアーサー王の土地であるイギリス、そして山岳地帯であるアルデンヌ、ヴォージュ、アルプスでとくに祝われています。そこではケルト的信仰がより長い間続き、最終的にフォークロアの伝統に姿を変えたのです。

暦の記憶において2月14日は別の祝祭にも一致しています。キリスト教の暦において、2月はよく知られているようにカーニバルに当てはまります。カーニバルは「豪華な」40日間続き、灰の水曜日の前の謝肉の火曜日で終わります。フィリップ・ワルテルが指摘していることですが、バレンタインはこの極めて異教的な祭りの記憶と共鳴するようになります。特に中世末においてそうなのですが、四旬節の禁欲の時期を前にして肉体の喜びが称えられます。しかし1453年のように四旬節が2月半ばに訪れたとすれば、一体どの神に身を捧げればよいのでしょうか。状況に応じて書かれた諸々のロンドンにおいて、シャルル・ドルレアン自身が暦の重なり合いを面白がりつ

²⁴ 異教における熊の象徴についてはミシェル・パストゥローが分析をおこなっている（Michel Pastoureau, *L'Ours, histoire d'un roi déchu*, Paris, Seuil, 2007）。またフィリップ・ワルテルはこの熊の象徴をカーニバルの暦と祝祭に関係づけている（Philippe Walter, *La Mémoire du temps*, Paris, Champion, 1999）。

つ、この厄介な偶然を笑っています（この一致のおかげでこの作品の日付がわかるのも事実ですが）。

四句節の頭に、聖バレンタイン、あなたがやって来る時に、あなたをむかえるのはいつものやり方をもってではありません。

「断食」と「憂い」をあなたは連れて来てしまう。誰がよるこんであなたを迎えるのでしょうか、聖バレンタイン、あなたがやって来る時に。

次回はもっと早くにおいでください。そうすれば皆は、ちがったやり方であなたを迎えるでしょう。選ばれるべきパートナーを連れて来て下さい、聖バレンタイン、あなたがやって来る時に²⁵。

シャルル・ドルレアンの批判は宗教的儀式と暦の暴政に向けられ、カーニバルやバレンタインの祭りに相応しい諧謔の精神をあと押ししています。しかしこの詩人にはより個人的なメランコリーが現われることにもなります。彼は幼年期に別のバレンタインの悲しみ、すなわち彼自身の母親（ヴァレンティーヌ・ヴィスコンティ）の死を乗り越えねばなりません（彼女は夫であるルイ・ドルレアンの暗殺後、数カ月で悲しみのあまり亡くなっています）。恋の機会や異教の記憶がこの個人的なメランコリーを消し去ってくれるわけではありません。冬眠あけの儀式が死者の再来という神話に結び付けられているとしてもです。時の過ぎ去りを痛感した中世末の詩人シャルル・ドルレアンは、暦の上に復活した太古の信仰を前にして、共同体の祭りの現前から距離をとって心中の思い・幻滅という危険な鏡に見入るのです。

これがあなたが祭日に与えてくれるすべてなのですか、聖バレンタイン。私を得

²⁵ « Saint Valentin, quant vous venez / En Karesme au commencement / Receu ne serez vraiment / Ainsi que a coustume avez / Soussy et Penance amenez : / Qui vous recevrait lyement, / Saint Valentin, quant vous venez ? / Une autrefois vous avancez / Plus tost et alors toute gent / Vous recuilliront autrement / Et pers a choysir amenez, / Saint Valentin, quant vous venez ! » (Charles d'Orléans, « Rondeau 77 », dans *Ballades et rondeaux*, éd. citée, p. 420-21). 聖バレンタインの祭日と灰の水曜日的一致から、校訂者ジャン＝クロード・ミュールタレールが述べるように、この詩が 1453 年に作られたものであることがわかる。

られるのは、希望という獲物と不幸な者たちの期待だけなのですか²⁶。

自然とその同盟者である愛は、別の創造的で強力なアレゴリーに対抗しなければなりません。すなわちメランコリー、中世末の詩人たち、とくにシャルル・ドルレアンに常に現われているメランコリーです。

結論として——雪、形、過ぎ去る色、時間による試験

バレンタイン的表現において、聖バレンタインの祭日の〔背景にある〕冬は、春が戻って来るという予感によって単純に消されはしません。冬もまたそれ自体で詩的な痕跡となります。雪がつかの間の表面を形成し、そのうえにはラインバウト・ダウレンガからジャック・ルーボーといった詩人たちが「さかさまの花」を描きます²⁷。聖バレンタインはほとんど抽象的な感受性を光と形の遊戯に付与します。すなわちシャルル・ドルレアンは「聖バレンタインの祭日の太陽」を「こっそりと」自分の部屋を明るくする燭台とし、ジェルマン・ヌーボーはパートナーの「雪の」髪を「白い蝶の飛翔のような」ものとイメージし、ルイス・ジュコフスキーは白の上にくみあったブドウのつるの緑陰を書きとめます。

季節という状況は両面価値的で、預言は中断や反転の可能性と無縁ではありません。オトン・ド・グランドソンにおいては欲望〔*désir*〕が荒野〔*désert*〕に転化し、暗闇が恋人の心を支配することもあります。同一の冒頭がこの意味上の不幸な反転の枠組みとして使われたことは意味深いといえるでしょう。オトン自身が『欲望のレー *Lai de désir*』を再利用して『荒野の嘆き *La complainte du désert*』を作ったようです。

²⁶ « Esse tout ce que m'apportez / a vostre jour, saint Valentin ? / N'auray je que d'espoir butin / l'actente des desconfortez ? » (« Rondeau 272 », *ibidem*, p. 622-623). シャルル・ドルレアンにおけるメランコリーの詩学については、ジャクリューヌ・セルキリーニ＝トゥーレの見事な研究 (Jacqueline Cerquiglini-Toulet, « À l'école de la mélancolie : quand un prince de vient poète. Destin d'une image », in *Être poète au temps de Charles d'Orléans (XV^e siècle)*, études réunies par H. Basso et M. Gally, Avignon, Éditions universitaires d'Avignon, 2012, p. 114-130) を参照。

²⁷ Jacques Roubaud, *La Fleur inverse*, *op. cit.* を参照。

美しいひとよ、私の方に目を向けて下さい、そして私の殉教を見て下さい。この世の何物にかえても私の欲望を言う気にはなりません。それどころかあなたに仕えて老いていきたいのです。（…）

私の心は苦しみ、私は嘆きます、私に襲い掛かった厄災を。それは美しいあなたの優しいまなざしのせいです。美しい人よ、あなたに誓いをたてます。わたしがあなたから遠くにいと、私はだれよりも貧しくなるのです。いったいどうしたらよいのでしょうか、死に近づくか、あるいは荒野に立ち去ってしまうことより。そうしてしまえば、私はあなたを愛さなくてもすむのですから²⁸。

シャルル・ドルレアンにおいては、宮廷風の理想化は悪天候という平凡なモチーフに場所を譲り、バレンタインは「雨、風、悪路」を導くものになります。それを伝える反復句では枕のある閉ざされた空間が特権化されています。熊やオオカミが歩き回り、メランコリーの幽霊のような動物たちが生起しますが、それらの動物たちは「気ままさ Nonchaloir」の自然な軽さに対抗して、孤独と嘆きによって養われています。

詩は時間軸の中に入ることで逃げさることもできるようになります。中世末には詩は歴史およびその試練と関わりをもつことになりました。詩を作品集の中に取り込むことや、詩にフィクションの枠組みを与えることは、詩をより人間固有の時間性に直面させるのです。

別の言い方をすれば、14世紀から21世紀まで、暦の時間の環は逃亡線によって横切られており、孤独に対峙して〔それぞれの世紀を結んで〕います。時の移ろいやすさを恋愛感情の永続性は忌避しようとしますが、そのためには異化と反復の遊戯が用いられます。

²⁸ « Belle, tournez vers moi vos yeux / Et connaissez mon vrai martyr : / Pour rien au monde je n'ose dire / Mon désir, j'aime au contraire autant / Me voir vieillir en vous servant – (...) / Mon cœur souffre et je me plains / Des maux dont je suis atteint / Pour la douceur de vos beaux yeux, / Belle, à qui j'envoie mes vœux. / Quand de vous je suis si lointain, / Plus qu'aucun autre de tout privé, / Que puis-je faire pour le mieux / Sinon souhaiter me rapprocher / De la mort ou bien m'exiler / En un désert, pour renoncer / À être astreint de vous aimer » (Oton de Grandson, *Poésies*, éd. citée, p. 515-521 (『荒野の嘆き』) et p. 251-262 (『欲望のレー』)). 『荒野の嘆き』が完全に収録されているのはパリ国立図書館所蔵フランス語写本 1131 の 69 葉表から 71 葉表においてのみである。そこでは『欲望のレー』の最初の 21 行が再利用されている。

無限に更新可能なものとして、バレンタインの詩は以下のようなゲームの規則に対応しています。すなわちそれは創造力のある伝統に属し、その伝統はさまざまな流通方法、すなわち民衆的あるいは学識ある書き物や音楽を利用します。それはまた再利用が可能です。オトン・ド・グランドソンや中世の作品集にまとめられた詩の場合がそうでした。またガートルード・スタインによる、一年を隔てて異なった受け手に宛てられた「とてもバレンタイン」（『同じが同じ』）がそうです。新聞から集められた小広告のモニタージュからなる、ステシー・ドリスの美しい『聖バレンタインの月』もそうでしょう。そのうちの最初の広告はエロティックな夢、ぶどうのイメージそして伝説の熊を蘇らせませす。

グリュシーヌ、いとしい人、もっともっと、夢と混ざった私のふさのような体を受け取ってください。あなたの熊、ブラン²⁹。

しかしあるバレンタインの詩はつねにただ一人の人間に届けられます。それはまた音楽的な「唯一の瞬間」なのです。「至純の愛」の詩人たち [=トルバドゥールたち] が発見した伝統に従いつつ、ガートルード・スタインはそれを新たに表現し直します。

私のバレンタインはとても素敵。／とても素敵でとても私のもの。／とても私のものな私のバレンタインはとても私のものでとても素敵。／とても素敵な私のバレンタインは私のもので、とても素敵でとても私のもので、私のものな私のバレンタイン³⁰。

「バレンタイン的表現」に、あるミュージカル [=『青春一座 *Babes in Arms*』] の

²⁹ « Glycine, ma douce, / Encore encore / grappes de mon corps / brassée de rêves / prends-en / Ton ours Brun » (Stacy Doris, *Paramour*, traduction C. Dubois et A. Portugal, Paris, P.O.L., 2009, p. 74). このアメリカの女性詩人は詩集中央の見開きページに「聖バレンタインの暦」を作っている。これは複数のフランスの代表的日刊紙が2月14日に掲載する諸々の三行広告から着想をえたものである。

³⁰ « Very fine is my valentine. / Very fine and very mine. / Very mine is my valentine very mine and very fine. / Very fine is my valentine and mine, very fine very mine and mine is my valentine » (Gertrud Stein, « Idem the same : A Valentine to Sherwood Anderson (1922) », dans *A Primer for Gradual Understanding Of Gertrud Stein*, ed. by R. B. Haas, Santa Rosa, Black Sparrow Press, 1971, p. 84).

歌も、何度も自由に演奏されつつ、呼応しているように思われます。最初のバージョン（なぜならその後書きなおされ検閲をうけたからですが）は1930年代、世界恐慌のどん底に現れました。後にジャズ・スタンダードとなった『私の素敵なバレンタイン』の歌詞にみられるのは、小さく〔little〕、可愛く〔sweet〕、写真には向かず〔unphotographable〕、そして面白く〔comic〕、とてもおかしな〔funny〕、といった表現です。

私のおかしなヴァレンタイン、可愛くて面白いヴァレンタイン／あなたは私を心の底から笑わせてくれるのよ／あなたの顔を見ていると吹き出しちゃうし、写真には向かないわね／でもそれでも私の大好きな芸術作品なの

ギリシャの彫刻よりは見劣りするし／口許はちょっとだらしなくて／その口についてでる言葉はちっとも気がきいていない

でも、髪の毛一本だって変えないでね／私のことを好きならね／可愛いヴァレンタインでいてちょうだい、いつまでもそのままね／そしたら毎日がヴァレンタインズ・デイになるから！³¹

〔解題〕

本稿は2013年10月29日に東北大学大学院文学研究科で行なわれたナタリー・コーブル (Nathalie Koble) 氏の講演会「バレンタインの詩—ある詩的伝統の発明—」

「Valentines : l'invention d'une tradition poétique」(同大学院フランス語学フランス文学

³¹ « My funny valentine / Sweet comic valentine / You make me smile with my heart / Your looks are laughable / Unphotographable / Yet you're my favourite work of art / Is your figure less than greek / Is your mouth a little weak / When you open it to speak / Are you smart ? / But dont change a hair for me / Not if you care for me / Stay, little valentine, stay / Each day is valentine's day » (Richard Rodgers et Lorenz Hart, « My Funny Valentine », 1937. この歌はアメリカのミュージカルであり、1937年4月にブロードウェイで上演された『青春一座 *Babes in Arms*』の台本の一部である。バスビー・パークレーによる映画化は1939年に行われ、ジュディ・ガーランドとミッキー・ローナーが出演していたが、そこではシナリオが書き直され原作の政治的行きすぎが和らげられている。『私の素敵なバレンタイン』はこの翻案からは消えてしまったが、しかしジャズの歴史においてその第二の生を歩み、何百回と演奏されることになる。〔日本語訳は村尾陸男『ジャズ詩大全 別巻・クリスマス編』、中央アート出版、1991、p. 185 によっている。〕

専攻分野主催)に若干の修正と注を加えたものの日本語訳である。ナタリー・コーブル氏はパリ高等師範学校准教授で専門は中世フランス文学、とくに中世文学テキストにおける形式意識、アーサー王物語群、現代文学・美術における中世の存在などを研究対象としている。これまでの主な著作・作品校訂として *Les « Prophéties de Merlin » en prose : le roman arthurien en éclats*, Paris, Champion (« Nouvelle Bibliothèque du Moyen Âge » 92), 2009 あるいは *Lais bretons : Marie de France et ses contemporains*, édition bilingue et introduction par Nathalie Koble et Mireille Séguy, Paris, Champion (« Classiques Champion Moyen Âge » 32), 2011などがある。

訳文中の訳者による補足は [] で示した。本文中の引用は原文によるものと現代仏語訳によるものの両方があるが、原則としてコーブル氏によって提供されたものを用いて訳している。これらの引用については可能な限り既存の日本語訳を用いた(既存訳中の改行は「/」で示している)が、訳者の調査が及ばなかったケースもあるだろう。読者のご寛恕を請いたい。また注における書誌情報などの表記について、統一を図るために訳者が手を加えた個所が多数あることを付言する。

今回の講演会開催および日本語訳作成にあたっては首都大学東京の西山雄二氏に多大な御助力をいただいた。ここに記して改めて西山氏のご厚情に深く感謝申上げたい。

Nathalie Koble, « Valentines : émergence d'une tradition poétique »

翻訳・解題＝黒岩卓(東北大学・准教授)